



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	土屋博著『宗教文化の地平—日本社会におけるキリスト教の可能性』（北海道大学出版会、二〇一三年）
Author(s)	三上, 章
Citation	基督教學, 49, 24-28
Issue Date	2014-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62434
Type	other
File Information	03mikami.pdf



土屋博著

『宗教文化の地平』

——日本社会における

キリスト教の可能性』

(北海道大学出版会、二〇一三年)

三 上 章

本書は、宗教学(教典論)・キリスト教学を研究する著者が、人間の宗教的営みの問題を探究するにあたり、狭義の「宗教」概念の制約を脱却し、できるだけ広い視野のもとに問題を把握・解明すべく歩んできた道行きの所産である。著者が問題解明のための作業仮設として提示するのが、「宗教文化」という概念である。本書は二部の構成である。「第一部「宗教文化」概念の効用」は、作業仮設の有効性に関わる論述であり、以下の章から構

成されている。

第一章 越境する宗教文化

第二章 伝播の需要と葛藤

第三章 宗教教育の公共性

第四章 日本におけるキリスト教主義学校教育の

ダイレンマ

第五章 スピリチュアリティ論と宗教文化(一)

第六章 スピリチュアリティ論と宗教文化(二)

第二部「宗教文化の諸相——キリスト教を手がかりとして」は、「宗教文化の諸相を具体的・社会的現実に即してとらえなおしていく」作業に関わる論述である。実例としてキリスト教とその周辺があつかわれ、以下の構成となっている。

第七章 伝承と記録

第八章 宗教文化を形成する教典(一)

第九章 宗教文化を構成する教典(二)

第一〇章 宗教研究と地域文化（二）

第十一章 宗教研究と地域文化（二）

第十二章 宗教論の曲がり角

本書は、著者が長年にわたり積み上げてきた論考が基になっているが、単なる学術書にとどまらず、広い範囲の読者に読まれることを願い、全面的に手を加えられている。本論の末尾に、「個人史的追記」として「ものところ——「精神」へのこだわりを超えて」という題の書き下ろしが付記されている。一九六〇年代初め、農学部の子生だった著者は文学部へ転部し、宗教学を専攻した。併せてプロテスタント・キリスト教の立場に身をおき、宗教学をめぐる学びもキリスト教研究から始めた。日本の社会と文化に向き合いながら、当事者として宗教的営みに関わり、宗教研究を続ける中で、著者は数々のディレンマに遭遇した。それらの葛藤を打破すべく努力する中で、著者の視野に開けてきたのが、「宗教文化」の概念である。この「個人史的追記」に照らして本書を読むとき、著者の考えをより身近なものとして感じ取ることができよう。

著者が示唆するように、「宗教と呼ばれてきた人間の営み」（まえがきiii）はすぐれて普遍性をもっており、これを理解するためには、「宗教」の概念ではとうていとらえきれない。私事で恐縮だが、評者も大学生の時、「福音派」という種類の欧米型プロテスタント・キリスト教を受容した。当初は「真理」を知ったと思いなし喜んでいたが、やがて「真理」の獲得はその喪失かもしれないことを知るようになる。著者が第一章で示す、「日本社会において人々が「何を宗教と呼んできたか」（一・一二）という宗教文化論的視点が、自分には欠落していたのである。

第二章は、日本におけるキリスト教の伝播と受容の問題を深く考えさせる。「伝道」を使命とする立場があるが、はたして「伝道」という概念で済ますことができるのだろうか。そもそも「布教」なのか「伝道」なのか「宣教」なのか問題であり、それを謙虚に考察することが求められているのではないだろうか（二・三三）。著者は、アメリカ福音派の一例としてビリー・グラハム福音伝道協会による「クルセード」（二・四二）に言及する。も

し良心の呵責なしに「十字軍」を意味するこの言葉を使うことができるとするならば、福音派以外の人と文化が見えなくなっているということであろう。著者の指摘によると、日本のキリスト教において、「伝道」のみならず、やがて「宣教」という言葉が意識的に用いられるようになった。その背景には、自らの宗教的イデオロギーに閉じこもるのではなく、「広くキリスト教徒以外の人々とともにこの世の課題を担おうとする姿勢を重視する考え方があった」(二二・五〇)。

第三章と第四章は、キリスト教主義大学でキリスト教関連課目を担当する者にとって、決して看過できない問題を取り扱っている。著者によると、公共性を旨とする大学においてキリスト教を教えるということは、聖書を教えればそれで済むという話ではない。問題は、聖書と呼ばれる「教典」をどのようなレヴェルで教えるのかである。多くの学生は、キリスト教的背景をもたず、キリスト教主義の大学に入ったなら「宗教を吹き込まれる」のではないかという危惧をもっている。そういう現状を鑑みると、著者が提言するように、「宗教に関する一

般的な教養」(三・七三)の教育という観点がどうしても必要となる。「身近な生活」に関わるキリスト教主義「生活に直結する」聖書のメッセージを伝えうる可能性」(四・一〇二)を追求することが、求められる。これに関連して、第五章と第六章において著者が提示する、「スピリチュアリティ」現象を、宗教文化論との関連で思想的に位置づける」アプローチは、「当事者性」の局面に目を向けさせてくれる。著者のいう当事者性とは、自らの宗教への固執ではなく、その弁護でもない。それは「宗教文化という形で社会的に拡散していく伝統的宗教集団のはざまに立ち、そこで生起するさまざまな「宗教的」現象を主体的に受けとめ、考える道」(六・一四四)に足を踏み入れ、歩みつづけることである。

「第二部「宗教文化の諸相——キリスト教を手がかりとして」の第七章・第八章・第九章は、あらためて「聖書」を「教典」という観点から見直すことの必要性を教示してくる。いわゆる聖書という書物を「聖なる」書と思っていない場合、新たに教典という観点に方向転換することは必ずしも容易ではない。大学一、二年頃の評者

は、聖書を多少なりとも西洋古典学や哲学の観点から見たことを学んでいたが、福音派キリスト教の立場に加入してからは、「聖書」は「誤りなき神の言葉」となった。以後、二〇年以上にわたり聖書によって養育されると同時に、束縛もされてきた。これまでの人生において、神学生、牧師、神学校教師、キリスト教関連科目担当大学教員を経験し、聖書学やイエス伝研究にもふれてきたが、どうもしっくりいかない状態が今もつづいている。イエス伝研究に関して言えば、著者が言うように、「日本のキリスト教においては、イエス論は多くの場合、近代欧米の『進歩的』価値観と重なり合ってきた。そのさいには、オリエンタリズムならぬオクシデンタリズムがイエス論を支配する」(七、一六九)ということなのかもしれない。

第一〇章・第一章は、宗教文化の観点から日本のキリスト教研究の方法を検討する試みである。著者は随所において、日本のキリスト教は欧米直輸入型の「神学」ではとらえきれないことを啓発してくれる。キリスト教神学に安住し、自らを「神学」の徒と同定して疑わない立場は、宗教の護教・弁明ではあっても、宗教の主体

的学問的研究にはならないであろう。著者は、日本のキリスト教研究のために、「キリスト教学」という概念を提唱するが、それは必ずしも大学のカリキュラムとしてのキリスト教学ではない。自覚的な「欧米とは異なる地域文化の中で営まれる日本のキリスト教研究」(二〇、二二七)であり、「さまざまな時代におけるさまざまな地域文化の中で、他の文化現象と絡み合いながら、それにもかかわらず独自性を主張しうるような」営み(二〇、二三〇)である。著者は、欧米輸入型のキリスト教研究が日本のキリスト教研究の発展を孤立・停滞させてきた局面に注目し、「それを突き破るには、もう一度新たな角度から反省的考察を試みる必要がある」(一一、二四一)ことを提言する。その際に求められる、四つの視点を提言する。すなわち、①「研究者がキリスト教との関係で自らをどう理解するか」②「研究対象としての『キリスト教』をどの次元でとらえるか」すなわち、文化との関わりの問題である。③「課題を目に見える形でとらえるべく、研究と研究の場所との関係が自覚的に問われなければならない」すなわち、キリスト教研究に

対して、大学と教会がそれぞれのような形で影響を与えていったかという問題である。④「キリスト教学」という概念は、いまだ生産的に展開されるに至っていないが、「今日の状況を考えると、ここにまさに新しい可能性が含まれていると思われる」(二一・二四一―二)。

第二章「宗教論の曲がり角」において著者は、『岩波講座宗教(全一〇巻)』(岩波書店、二〇〇三年～二〇〇四年)をとりあげ、「その内容を総合的視点から批判的に論評する」(二二・二六二)ことによって、本書で展開した宗教文化論の自己理解を試みる。

人類が長きにわたり歴史と社会の現実の中で経験してきた宗教的・文化的営みは、「宗教」という概念の中に閉じ込めることはできない。自己の属する宗教集団に限定されることがらでもない。目を上げて見渡せば、その水平は果てしなく拡がっている。しかし、そもそも見渡すということが、なかなか容易ではない。本書は、もつと自己の視界を広げるとともに、地平に向かって現実に進んでいくことを願う者にとって、よき案内書・案内人となるであろう。

石川明人

『戦場の宗教、軍人の信仰』 (八千代出版、二〇一三年)

堀 雅彦

「軍人もまた平和を祈る」。この端的な事実を著者は一貫して見据え、祈りの主体としての軍人、あるいは祈りの場としての戦場のありようを、そこに含まれる矛盾や逆説とともに描き出そうとしている。⁽¹⁾ 著者の示唆するところ、私たちの暮らす現代社会はほぼ例外なく、何ほどか戦場であり、軍人ならざる私たち自身もまた、「何らかの形で戦争や軍事に関わっている」ことに変わりはない。⁽²⁾ この事情を了解するとき、本書の論考は極めて射程の広いものとして受け取れるだろう。

本書は主に五つの章からなる。